岩波文庫

1666—1668

みみずのたはこと

下

徳冨健次郎著

岩波書店

昭和十三年六月一日　第一刷發行
昭和二十五年六月十日　第八刷發行

みみずのたはこと　下（全二冊）
定價九拾圓

著者　徳冨健次郎

東京都千代田區神田一ッ橋二丁目三番地
發行者　岩波雄二郎

長野市岡田町一七六番地
印刷者　田中重彌

發行所　東京都千代田區神田一ッ橋二ノ三　株式會社　岩波書店

落丁本・亂丁本はお取替いたします

大日本法令印刷・製本

岩波文庫
1666—1668

みみずのたはこと

下

徳冨健次郎著

岩波書店

目次

過去帳から
墓守……一五
網島梁川君……二四
梅一輪……三一
關寛翁……六五
次郎櫻……一〇〇
きぬや……一〇五
命がけ……一一一
曉齋畫譜……一一七
落穗の搔き寄せ
デデン……一二五

芝生の上……一二八
小鳥……一二九
炬燵……一三一
蓄音器……一三三
春七日……一三六
ある夜……一四三
與右衛門さん……一四七
五月五日……一五三
紫雲英……一五六
印度洋……一五九
自動車……一六一
デカの死……一六五
ハムレット……一六八
春の暮……一七一
首夏……一七三

憎むと枯れる……一七五
麥　愁……一七七
堀　川……一七九
ムロのおかみ……一八五
田圃の簑笠……一八七
つゆ霽れ……一八九
有たぬ者……一九一
食はれるもの……一九三
蜩……一九五
夏の一日……一九七
明治天皇崩御の前後……二〇〇
御大葬の夜……二〇九
東の京西の京……二一二
乃木大將夫妻自刄……二一四
コスモス……二一八

秋さびし……二三〇
展望臺に上りて……二三二
暮秋の日……二三一
二つの幻影……二三三
入　營……二三六
生　死……二三九
天理教の祭……二四二
渦　卷……二四六
透　視……二四八
雪……二五二
讀者に……二五九
附　錄
ひとりごと

蝶の語れる……二八七
旅の日記から
熊の足跡
勿來……二八八
淺蟲……二九〇
大沼……二九一
札幌へ……二九五
中秋……二九六
名寄……二九九
春光臺……三〇一
釧路……三〇三
茶路……三〇六
北海道の京都……三一〇
津輕……三一一

紅葉狩
紅葉……三二三
義仲寺……三二七
宇治の朝……三二九
嫩草山の夕……三三三

「みみずのたはこと」に關する著者の文章
引き札
みゝずのたはこと
黒い眼と茶色の目――の引越について――……三三七
序文
百〇一版の卷首に……三三九
復活百〇八版「みみずのたはこと」の卷首に……三三二
廣告文
みゝづのたわこと（新刊豫告）……三三四
みゝずのたはこと（新刊）……三三五

みゝずのたはこと(廿八版)……三三六
武蔵野の土の産物みゝずのたはこと……三三六
みゝずのたはこと(ポイント改版)……三三七
みゝずのたはこと(七十四版)……三三八
みみずのたはこと(八十三版)……三三九
みみずのたはこと(百〇一版)……三四〇
みみずのたはこと(百〇五版)……三四〇
復活した「みみずのたはこと」(百〇八版)……三四一
岩波文庫「みみずのたはこと」に就て……三四三
あとがき……三四七

過去帳から

墓守

一

彼は粕谷の墓守である。

彼が家の一番近い隣は墓場である。門から唯三十歩、南へ下ると最早墓地だ。誰が命じたのでもない、誰に頼まれたのでもないが、家の位置が彼を粕谷の墓守にした。

墓守と云つて、別に墓掃除するでもない。然し家が近くて便利なので、春秋の彼岸に墓參に來る者が、線香の火を借りに寄つたり、水を汲みに寄つたりする。彼の庭園には多少の草花を栽培して置く。花の盛季は、大抵農繁の季節に相當するので、悠々と花見の案内する氣にもなれず、無論見に來る者も無い。然し村内に不幸があつた場合には、必庭園の花を折つて弔儀に行く。少し念を入れる場合には、花環などを拵へて行く。

墓守のついでに、墓場を奇麗にして、花でも植ゑて置かうかと思ふが、それでは皆が墓參に自家の花を手折つて來ても引立たなくなる。平生草を茂らして、春秋の彼岸や盆に墓掃除に來るのも、農家らしくてよい。墓地があまりにキチンとして居るのも、好惡である。と思ふので、一向

構はずに置く。然し整理熱は田舎に及び、彼の村人も墓地を擴張整頓するさうで、此程周圍の雑木を切り倒し、共有の小杉林を拓いてしまうた。いまに櫻の生垣を遶らし、櫻でも植ゑて奇麗にすると云うて居る。惜しい事だ。

二

彼は墓地が好きである。東京に居た頃は、よく青山墓地へ本を讀みに夢を見に往つた。粕谷の墓地近くに卜居した時、墓が近くて御氣味が惡うございましようと村人が挨拶したが、彼は滅多な活人の隣より墓地を隣に持つことが寧嬉しかつた。誰も胸の中に可なり澤山の墓を有つて居る。眼にこそ見えね、我等は夥しい幽靈の中に住むで居る。否、我等自身が誰かの幽靈かも知れぬ。何も墓地を氣味惡がるにも當らない。

墓地は約一反餘、東西に長く、背は雜木林、南は細い里道から一段低い畑田圃。入口は西にあつて、墓は||||形に並んで居る。古い處で寛文元祿位。銀閣寺義政時代の寶德のが唯一つあるが、此は今一つはりがねで結はへた二つに破れた秩父青石の板碑と共に、他所から持つて來たのである。以前小さな閻魔堂があつたが、乞食の焚火から燒けてしまひ、今は唯石刻の奪衣婆ばかり片膝立てゝ凄い顏をして居る。頰杖をついて居る幾基の靜思菩薩、一隅にずらりと並んだにこ〳〵

顔の六地藏や、春秋の彼岸に紅いべゝを子を亡くした親が着せまつる子育地藏、其等が「長十山、三國の峰の松風吹きはらう國土にまぢる松風の音」だの、上に梵字を書いて「爰迫福者爲蛇蟲之靈發菩提也」だのと書いた古い新しいさまゞの卒塔婆と共に、寂しい賑やかさを作つて居る。植ゑた木には、椿や寒中から咲く赤椿など。百年以上の百日紅があつたのは、村の飲代に植木屋に賣られ、植木屋から粕谷の墓守に賣られた。餘は在來の雜木である。春はすみれ、蒲公英が何時の間にか默つて咲いて居る。夏は白い山百合が香る。蛇が墓石の間を縫うてのたくる。秋には自然生の秋明菊が咲く。多は南向きの日暖かに風も來ぬので、隣の墓守がよくやつて來ては、乾いた落葉を踏んで、其處に日なたぼこりをしながら、取りとめもない空想に耽る。

三

田舍でも人が死ぬ。彼が村の人になつてから六年間に、唯二十七戸の小村で、此墓場にばかり葬式の八つもした。多くは爺さん婆さんだが、中には二八の少女も、また傷い氣の子供もあつた。

ある爺さんは八十餘で、死ぬる二日前まで野ら仕事をして、ぽつくり往生した。羨ましい死に樣である。ある婆さんは、八十餘で、もとは大分難義もしたものだが辛抱しぬいて本家分家それぞれ繁昌し、孫曾孫大勢持つて居た。ある時分家に遊びに來て歸途、墓守が緣側に腰かけて、納